

視覚障害者に対する災害時の行動と心理に関する調査研究

熊倉 孝行*, 渡邊 美穂*

概要

視覚障害者を対象に、火災や地震に対する防災意識や防災行動力の実態を把握するためアンケート調査を実施した。

主な結果については次のとおりである。

- 1 日常生活では、本調査対象者のうち、ほとんどの人が火を使用しており、そのうち半数近くの人が火の危険を感じた経験を有している。
- 2 「避難場所までの避難経路の確認」の必要性を感じ、防災訓練の種目として希望する人が多い。
- 3 防災訓練は、「わかりやすさ」が最も重要である。
- 4 ほとんどの人が近隣の助け合いを望んでいる。
- 5 個人情報事前に消防署に知らせておきたいと考える人が多い。

1 はじめに

災害弱者の防災意識や防災行動力を把握することは、今後の防災指導や震災対策を推進するうえで極めて有益である。第四研究室においては、高齢者、年少者及び障害者（肢体不自由者・聴覚障害者）を対象に計画的に研究を推進してきた。

平成11年度は災害弱者として視覚障害者を対象に、火災や地震に対する防災意識や防災行動力を明らかにし、また当庁の施策に対する意見などを把握することを目的とし、アンケート調査を実施している。

2 調査方法等

(1) 調査対象者

都内全域に広く会員を持つ障害者福祉団体である「東京都盲人福祉協会」及び「東京視力障害者の生活と権利を守る会」に協力を得て、両団体に所属する視覚障害者470名を対象とし調査を実施した。なお、都内には視覚障害者が約3万4千人おり、障害者福祉団体に属さない人も多い。したがって、本調査結果は当該2団体に属さない人たちの意見は反映されておらず、偏りがありえることを付言しておく。（資料2「視覚障害者の現況」参照）

(2) 質問項目について

質問は火災について6項目、地震について5項目、防災訓練について4項目、消防行政について4項目の合計19項目及び属性に関する6項目で構成されている。

本アンケート調査結果と比較するために、以下の各質問項目とできるだけ同じ質問項目を作成し、様々な角度

から比較できるよう試みた。

ア 「消防に関する世論調査（平成11年11月東京消防庁指導広報部広報課）」（以下、「世論調査」という）

イ 「肢体不自由者に対する災害時の行動と心理に関するアンケート調査結果（平成9年5月第四研究室）」（以下、「肢体不自由者」という）

ウ 「聴覚障害者用緊急ファクシミリ通報登録者に対する災害時の行動と心理に関するアンケート調査結果（平成11年4月第四研究室）」（以下、「聴覚障害者」という）

また、質問項目は、「東京都盲人福祉協会」及び「東京視力障害者の生活と権利を守る会」より、目の不自由な方たちの日常生活や実態、消防・防災に関する意見を聞きながら作成し、現実にそぐわない質問や矛盾しているようなものがないように注意した。また、別に説明が必要な項目についてはわかりやすくするため、説明書きを付した。

(3) アンケート用紙及び依頼文について

弱視の人に対しては16ポイントに拡大した文字を、また、日頃点字を使用している人に対しては点字を用いて作成した。

(4) アンケート用紙の配付・回収について

アンケート用紙は調査の目的や主旨を記載した依頼文と返信用封筒を同封して送付した。なお、点字で回答されたものについては、両協会の協力により普通文字に訳した。

(5) プライバシーの配慮について

* 第四研究室

アンケート用紙は無記名であり、個人が特定できないようにプライバシーには十分配慮するとともに、集計結果は公表する旨を依頼文に記載し、周知を図った。

(6) 調査期間

平成 11 年 10 月 1 日から 10 月 31 日まで

(7) 集計・分析方法

集計方法は単純集計及び2つの質問項目から成るクロス集計を行った。無回答については集計の母数から除いた。そのため、クロス集計では、それぞれ質問項目における単純集計の母数と異なる場合がある。

(8) 回収状況について

発送した 470 部のうち、平成 11 年 10 月 31 日までに回収できたものについて集計を行った。回収状況については表 1 のとおりである。

表 1 配付回収状況

配付数	総回収数	回収率
470 部	189 部	40.2%

(9) 参考資料

資料 1 記述回答一覧

資料 2 視覚障害者の現況

3 調査結果

(1) 属性について

ア 障害者手帳の等級の構成

障害の等級は身体障害者福祉法により 1 級から 6 級に区分されており、1 級と 2 級は障害の程度が高く、3 級以下は障害の程度が低いとされている。東京都全体の視覚障害者の現況では 1 級と 2 級あわせて約 60% であるが（資料 2 「視覚障害者の現況」図 29 参照）、本調査結果では 1 級が 72.1%、2 級が 20.6% で合わせて 92.7% を占めており、3 級以下はほとんどいない。

イ 年代構成

50 歳以上の人が多く、40 歳以下の方は全体の 5 分の 1 以下であり、壮・高齢者が圧倒的に多い。平均年齢は 59.3 歳である。東京都全体の視覚障害者の現況でも同様の傾向がみられる。（資料 2 「視覚障害者の現況」図 30 参照）

ウ 性別

男性が 64.3%、女性が 35.7% で男性の方が多い。

エ 外出状況

日常生活における単独での外出状況では、白杖などの補装具や盲導犬を用いたり手引きを伴うことをせずに外出できる人は 39.1% と多い。障害の程度の高い人の方が手引きや白杖等の補装具を必要とする人が多くなっている。

オ 同居状況

「晴眼者と同居している人」が 40.7% で最も多く、次

いで「視覚障害者と同居している人」が 22.5%、「晴眼者と視覚障害者と同居している人」は 18.7% である。「一人暮らし」の人は 15.9% いる。

カ 住居状況

一戸建て住宅の居住者と、共同住宅の居住者の比率はほぼ半々である。年代別にみると、40 歳代以下では共同住宅に住んでいる人の比率が多くなっている。また、同居状況別にみると、「晴眼者と同居している人」は一戸建てに、「一人暮らし」や「視覚障害者と同居している人」は共同住宅に住んでいる人が多い。

(2) 火災について

ア 質問 1: 「もし、あなたの家で火災が発生した場合、あなたはどのようなことができますか。」

火災を知った時の火災の規模や発生場所の状況、その時の同居者の有無などの諸要素によって、健常者でもその時々への対応は異なるが、上記質問から回答者が火災の場面を想定した場合、日頃から心がけていることに基づいて回答してもらった。

「119 番通報する」「大声で知らせる」などその場でできることについては、大半の人が可能と回答しているが、「消火する」と答えた人は少ない。これは、「消火する」という行動に、「消火器などの使用方法を知らないと使えない」、「状況によっては自らが危険となる」など、動作の困難性やリスクが伴うことに起因すると推測される。

また、肢体不自由者・聴覚障害者と比較すると、視覚障害者は、「119 番通報する」「大声で火災を知らせる」「屋外に避難する」と回答した人が多いが、「消火する」と回答した人は少ない。（図 1）

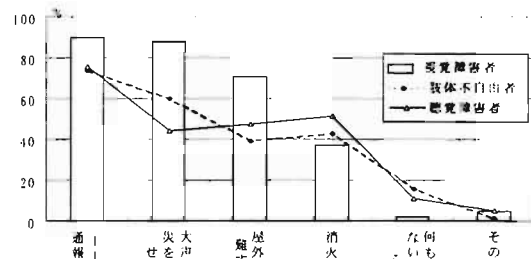


図 1 火災時にできること（複数回答）

イ 質問 2: 「あなたは日常生活の中で火を使いますか。」

90% 近くの人が日常生活で火を使うと回答しており、日常においては視覚障害者も、健常者と同じように火に接していることが予想される。また、男女別では男性の 83.6% に対して、女性は 95.4% の人が日常的に火に接している。（図 2）

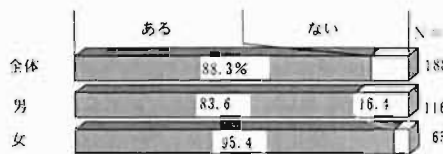


図2 男女別火の使用の有無

質問2-1: 「どういときに火を使いますか。」

また、火を使う目的については、「調理」、「暖房」が多く、日常生活に欠かせない用途での使用が多いことがわかる。(図3)

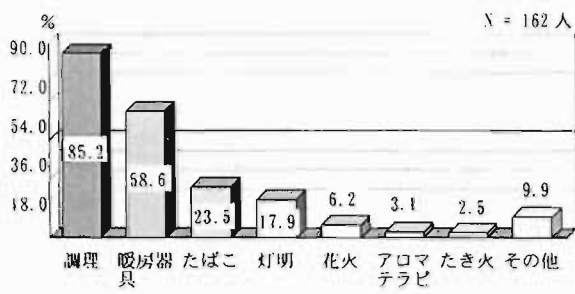


図3 どういう時に火を使うか(複数回答)

質問2-2: 「火を使っていて危険を感じた経験がありますか。『ある』と答えた人はどんな危険でしたか。」

日常生活で火を使用する人たちの中で危険を感じたことのある人は47.2%であった。男女別では女性が61.4%と高く、「調理」などの大きな火種を使用する頻度が高く、危険に遭遇する機会も多いことが予想される。(図4)

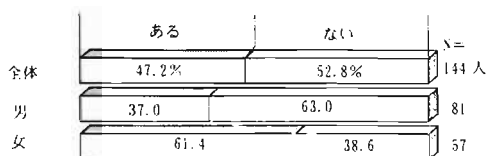


図4 男女別火の危険を感じた経験

どうい危険を感じたかという質問に対しては、「ガスコンロを消し忘れていることに気づかずに、やけどした」「鍋の空だきをした」など、ガスコンロや調理に関するものが多く、特に、揚げ物の調理に関するものだけで23.8%に達した。(図5 詳細は資料1「記述回答一覧」参照)

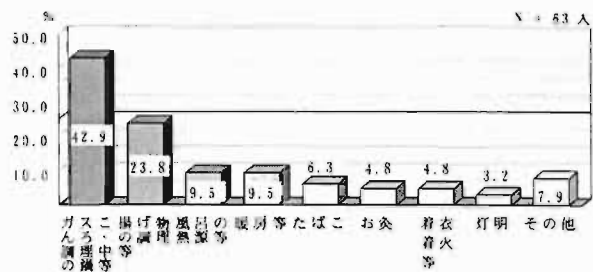


図5 火の危険を感じた原因(自由記述)

質問3: 「あなたの家では火災に備えて何か用意をしていますか。」

家庭で火災に備えて準備しているものとしては、「風呂の水のためおき」、「消火器」、「ガス漏れ警報器」を備えている人が多く、世論調査と比較して特に差は見られない。(図6)

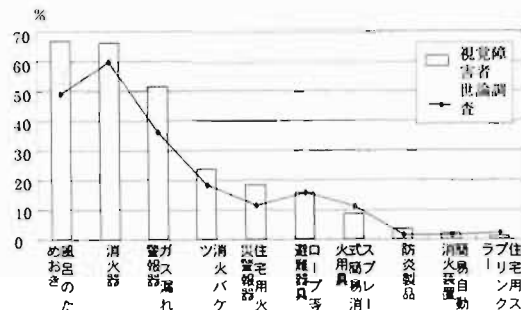


図6 火災に備えて準備しているもの(複数回答)

質問4: 「あなたは消火器を使って消火する自信がありますか。」

「使い方は知っているが消火できない」と答えた人が最も多い。また、消火器で消火する自信がある人と併せると、62.5%の人が消火器の使い方を知っていることがわかる。消火する自信がある人が15.5%であるが、世論調査では37.4%で、視覚障害者の2倍以上である。(図7)

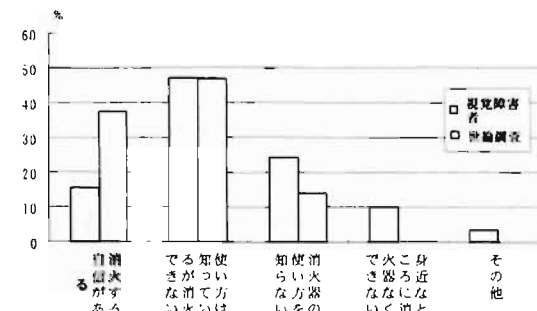


図7 消火器で消火する自信(択一式)

質問5: 「デパート・病院・駅など多数の人が集まる場所で火災が発生した場合に避難の手助け・手がかりとなるものはどのようなものですか。」

多数の人が集まるデパート・病院・駅などで火災が発生した場合の避難には、非常に困難な状況が予想される。そのような状況下で、避難の手がかりとなり得るものとしては、「近くにいる人の誘導」、「拡声器による指示や館内放送」など人的な援助を挙げた人が多い。(図8)

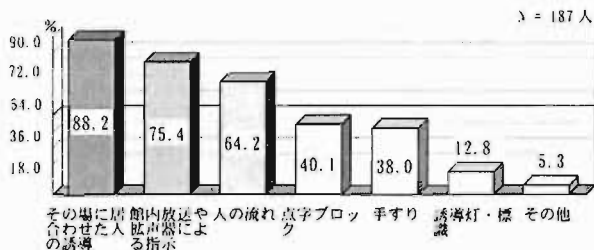


図8 多数人がいる場所で火災が発生した場合の避難の手がかり (複数回答)

カ 質問6: 「初めて行くホテルや旅館などの宿泊施設での避難方法などをどのように確認しますか。」

避難方法を確認しない人は27.0%いるが、それ以外の人は何らかの方法で確認している。「付添い人と宿泊するようにしている」人が最も多く、次に「非常口まで歩いて確認する」人が多い。(図9)

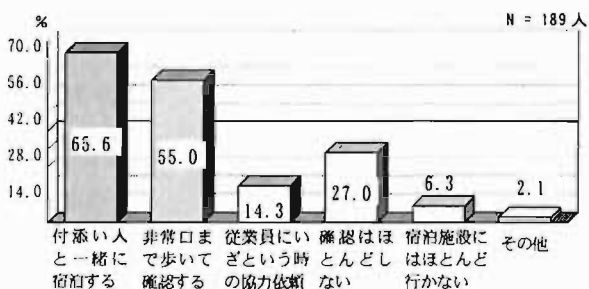


図9 宿泊施設での避難の確認 (複数回答)

(3) 地震について

ア 質問7: 「大地震が発生し避難場所への避難が必要な場合、あなたは避難する自信がありますか。」

大地震が発生し、避難場所への避難が必要な場合、避難する自信があると回答した人は29%である。等級別に比較すると、障害の程度の低い人の方が避難できると答えた人が多い。(図10)

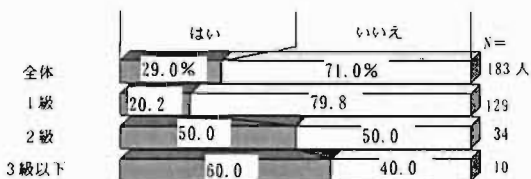


図10 等級別地震時に避難する自信の有無

イ 質問8: 「あなたの家庭では大地震に備えて何か準備をしていますか。」

大地震に備えて準備しているものでは、「携帯ラジオ」、「懐中電灯・ろうそく」、「折りたたみ式白杖」が多い。

世論調査と比較すると、視覚障害者では「携帯ラジオ」、「非常時の話し合い」を挙げた人が多い。また、「特に準備していない」と答えた人は少ない。(図11)

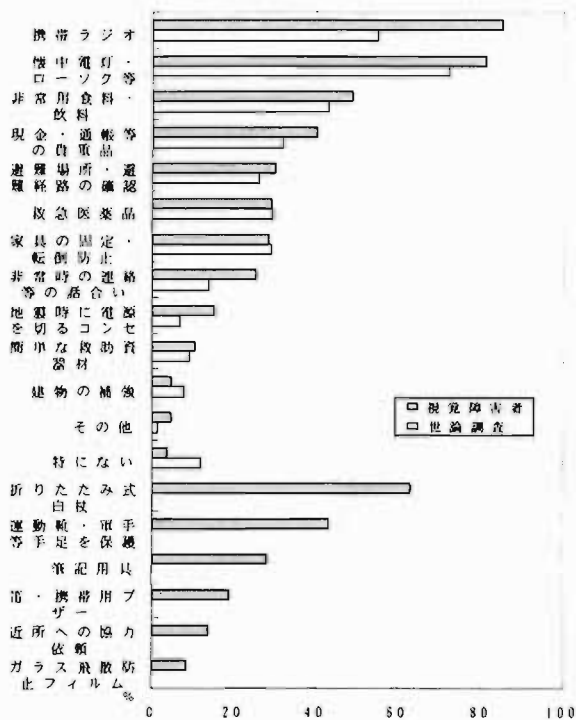


図11 大地震に備え準備しているもの (複数回答)

ウ 質問9: 「避難場所・避難所までの避難経路をどのように確認しましたか。」

避難場所・避難所までの避難経路を確認していない人が最も多く37.6%だった。しかし「自分一人で」、「付添いの人と」又は、「防災訓練などに参加して」などの方法で、実際に歩いて確認した人も54人で約40%いた。「その他」では、「役所の広報誌で知った」という人などがいた。(図12)

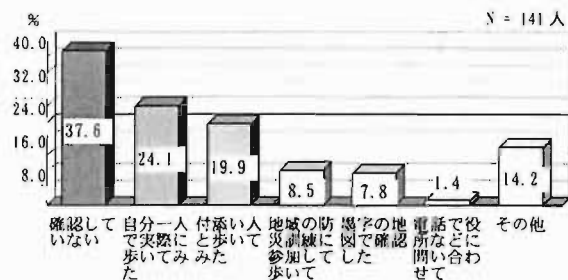


図12 避難経路の確認方法 (複数回答)

避難経路の確認方法別に大地震発生時の「避難する自信の有無」を比較すると、「自分一人で歩いて確認した」人は避難する自信のある人が多い。また、墨字（点字に対しての普通文字）が読める人の場合、「墨字の地図で確認した」ことは高い自信につながっていると推測される。（図13）

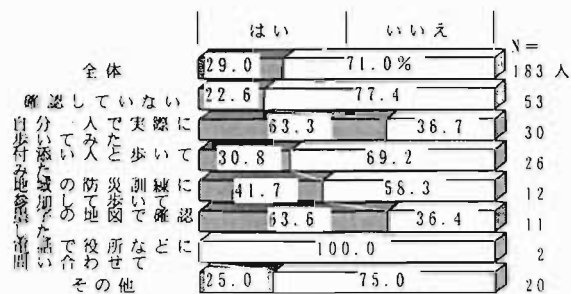


図13 避難経路確認方法別避難の自信の有無

エ 質問10:「避難所・避難場所までの避難経路を確認していない方はその理由は何ですか。」

避難場所までの避難経路を確認していない人の中でも、確認する必要性を多くの人が認識している。（図14）

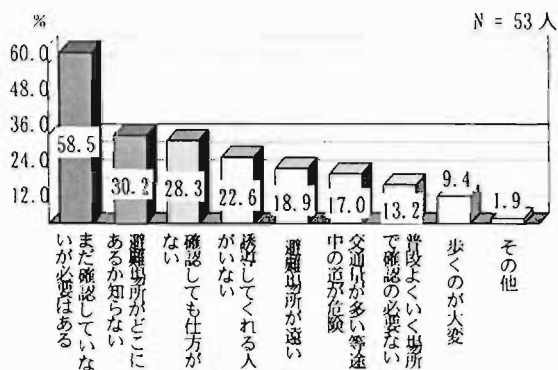


図14 避難経路を確認しない理由（複数回答）

オ 質問11:「東京に大地震が発生した場合、特にどのような情報を知りたいと思いますか。」

家族の安否、火災の発生状況、避難すべきか否かの状況を挙げた人が多く、世論調査とは大きな差はない。（図15）

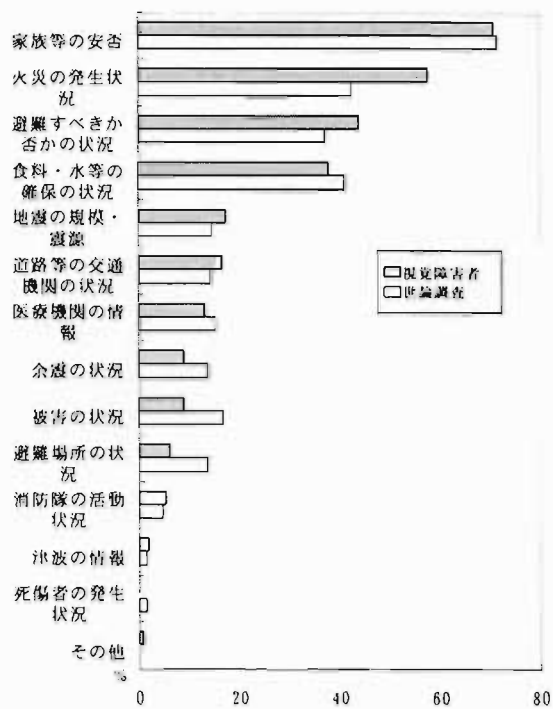


図15 大地震発生時知りたい情報（3つ以内）

(4) 防災訓練について

ア 質問12:「あなたは過去3年以内に防災訓練に何回参加しましたか。」

過去3年間に防災訓練に参加したことのある人は41.5%おり、3回以上参加した人は10.7%いる。ただし今回の調査対象者は障害者福祉団体構成員であり、団体ぐるみで防災訓練等を企画する場合も多い。そのため、これら団体に入会していない方たちの防災訓練参加経験者はこの結果よりも相当低いことが推測される。（図16）

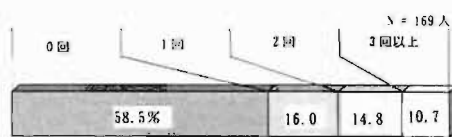


図16 防災訓練の参加回数

また、防災訓練に1回以上参加したことのある人を「参加経験あり」とし、参加回数0回の人を参加経験なし」として、クロス集計をした。なお、本質問には回答していないものの、次の質問「どのような訓練に参加したか。」に答えている6人を、「参加経験あり」とみなし集計した。消火器で消火する自信について訓練参加経験の有無で比べると、「訓練経験のある」人の方が「消火器の使い方を知っている人」が多く、防災訓練への参加が防災行動力や、防災に関する知識の普及につながっていることがわかる。（図17）

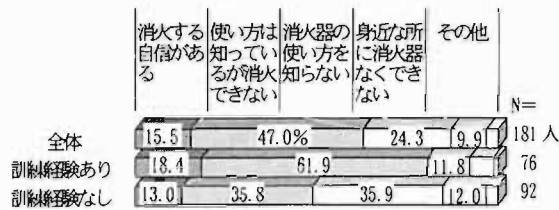


図 17 訓練経験別消火の自信（択一式）

質問 12-1：「あなたが参加した訓練は次のどれですか。」

「地震体験」、「消火」訓練に参加した人が多い。（図 18）

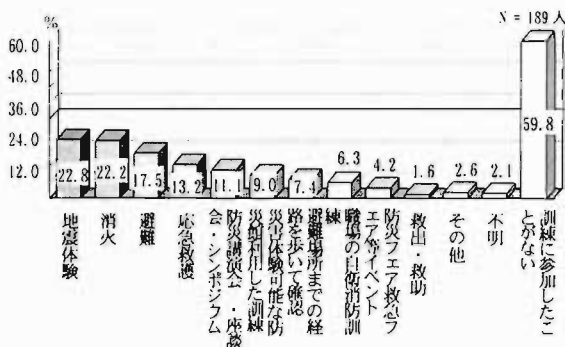


図 18 参加した訓練の種類（複数回答）

質問 13：「あなたは防災訓練に参加したいと思いますか。」

防災訓練に参加を希望する人は 63% である。

訓練経験の有無で比較すると、訓練に参加したことのある人の方が、再度訓練に参加したいと希望している人が多い。（図 19）

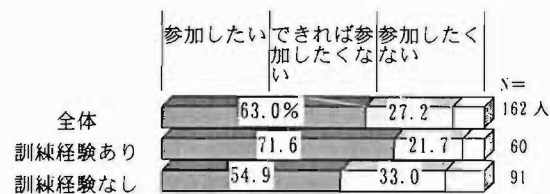


図 19 訓練経験別参加希望（択一式）

質問 13-1：「防災訓練に参加したくない理由は何ですか。」

「実火災では何もできないから」という無力感や、説明が中心の訓練などでは、「見えない」・「見えにくい」ことから「わかりにくいから」と答えた人が多い。（図 20）

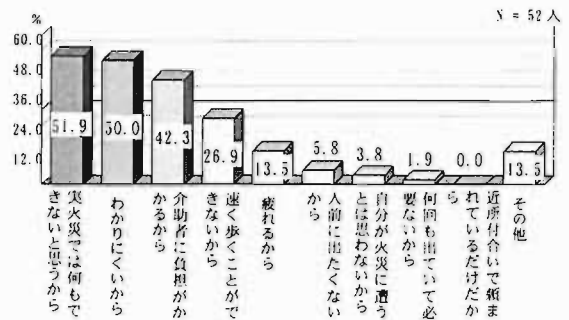


図 20 訓練に参加しない理由（複数回答）

質問 14：「あなたが防災訓練に参加するとしたらどのような環境・状況がいいですか。」

「指導者が視覚障害者に対する理解、知識を持っていること」「一人一人が器具に触る等体験の多い訓練」と答えた人が多い。（図 21）

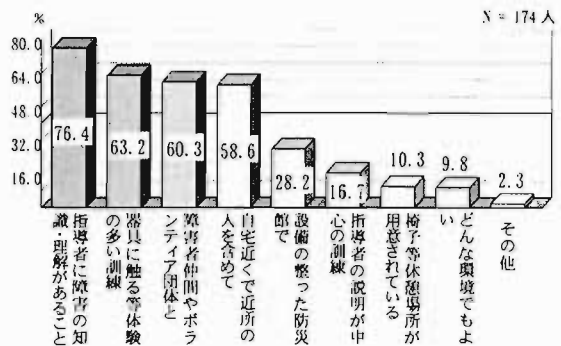


図 21 訓練に希望する環境（複数回答）

質問 15：「あなたはどのような種類の防災訓練に参加したいですか。」

建物の中から非常階段や非常口を使って避難する「避難」、「消火」、「地震体験」の参加を望む人が多い。また、実際に参加したことのある人は少ないが、「避難場所までの経路を歩いて確認」を希望している人も多い。（図 22）

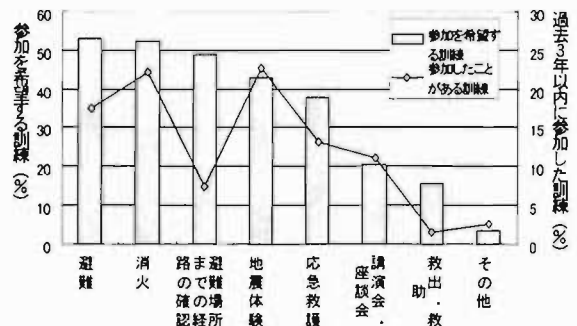


図 22 参加したい訓練の種類（複数回答）

(5) 消防の施策について

ア 質問 16:「東京消防庁では体の不自由な方や高齢者などと近隣の住民のみなさんが助け合う体制づくりをすすめています。あなたにとって近所との助け合いは必要だと思いますか。」

ほとんどの人が助け合いは必要だと考えており、肢体不自由者や、聴覚障害者を対象とした結果よりも高くなっている。(図 23)

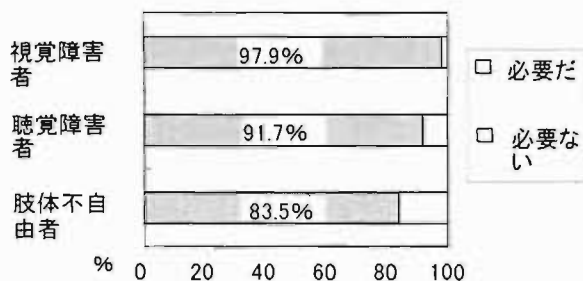


図 23 近隣との助け合いは必要か

質問 16-1:「助け合いが必要と答えた方にお聞きします。どのような助け合いを希望しますか。」

「いざという時にかけつける」「地震や火災のとき避難の手助けをする」と答えた人が多く、非常時の援助を希望する人が多い。世論調査の結果は一般的な成人を対象として「どのような助け合いができますか。」という質問であり、いわば助ける側の意見といえるが、やはり非常時の助け合いを答えた人が多い。(図 24)

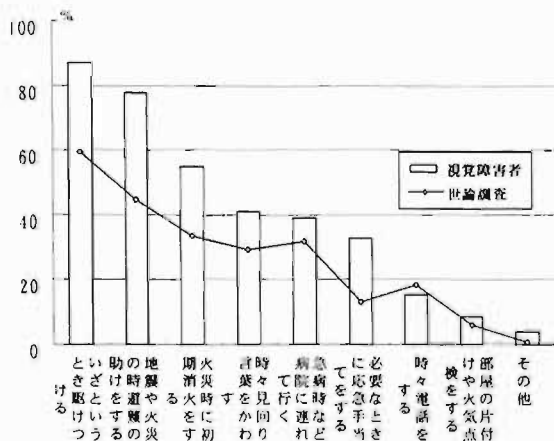


図 24 どのような助け合いを望むか (複数回答)

質問 16-2:「助け合いが必要でない理由は何ですか。」

近所との助け合いを必要ではないと回答した人は4人だけであるが、その理由としては、4人中3人が晴眼者と同居しており、「自分や家族でできるから」と回答している。(表 2)

表 2 助け合いが不要な理由 (複数回答)

自分や家族でできることだから	3
ふだんから隣近所との付き合いがないから	2
他人のことにあまり関わってほしくないから	1
行政にまかせておけばいいから	1
面倒だから	1
プライバシーが漏れるのがいやだから	0
その他	1

イ 質問 17:「あなたが東京消防庁の防火安全対策として希望することは何ですか。」

東京消防庁が推進する防火安全対策として希望することを2つ回答してもらった。「緊急通報システムや火災安全システムの普及」を挙げている人が55.3%で最も多い。「防災製品の普及」と答えている人が肢体不自由者・世論調査より多く、「障害のある方や高齢者世帯への定期的な訪問」「火災警報器や自動消火装置の普及」を挙げる人は少ない。(図 25)

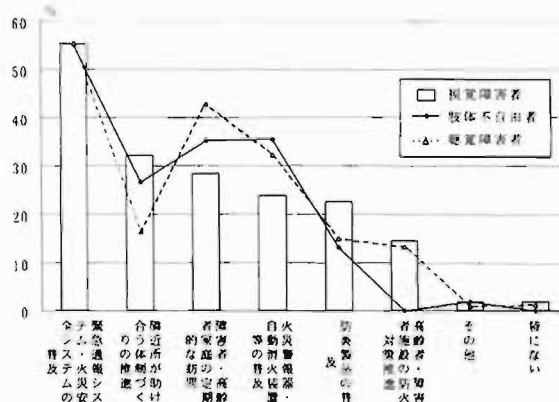


図 25 東京消防庁の防火対策で望むこと (2つ以内)

ウ 質問 18:「火災など万一のときのため、消防署に名前や住所、障害の程度などの個人情報を知りたいとおきたいとお考えですか。」

火災など万一のときに迅速で適切な対応をとるため、消防署に事前に名前・住所・障害の程度などの個人情報を知らせておきたいと思っている人は80%である。(図 26)

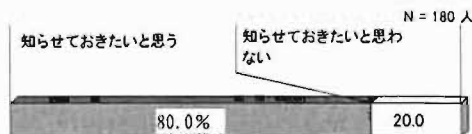


図 26 消防署に個人情報を知らせたいと思うか

エ 質問 19:「東京消防庁に対する意見・要望」

東京消防庁に対する意見・要望については 60 人の方から回答があり、13 のカテゴリーに分類した。「防災訓練・防災教育に関するもの」、「災害時の情報伝達に関するもの」がそれぞれ 12 件で最も多い。「防災訓練・防災教育」では、視覚障害者が気軽に参加できる訓練の機会を求めるものや、わかりやすい訓練を希望するものなどがあり、視覚障害者の防災訓練に対するニーズの強さがうかがえる。「災害時の情報伝達に関するもの」では、視覚障害者に対する情報伝達のあり方など参考になるものが多い。

他には、災害時の活動に対する「感謝等」、地域の交流の必要性や災害弱者対策の充実などを希望する「近所との協力体制」に関する意見・要望等が挙げられた。(図 27 詳細は資料 1「記述回答一覧」参照)

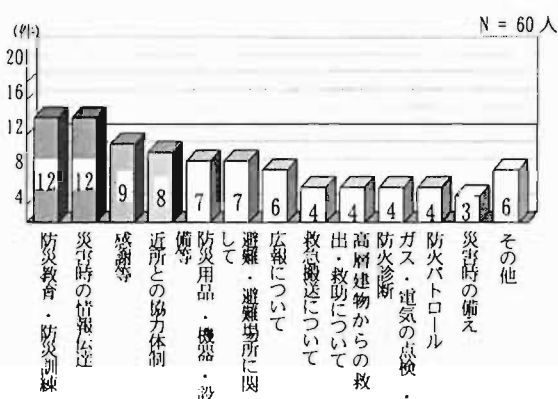


図 27 東京消防庁への意見・要望（自由記述）

4 まとめ

通常、生きていくために必要な情報の 80% から 90% は、視覚をとおして入手していると言われている。また、「視覚の優位性」といい、視覚からの情報は聴覚や触覚などの他の感覚から得た情報の上位に立ち、他の感覚からの情報を統合するはたらきを持っている¹⁾。そのような重要な情報入手の手段が失われ、あるいは損なわれていることは、特に災害時の行動・心理に大きな影響を及ぼすものと推察される。

視覚による情報入手の手段が完全に失われている場合を「全盲」といい、機能が低下している場合を「弱視」という。

障害手帳の等級は 1 級から 6 級までで 1 級が最も障害の程度が高く、6 級が最も低い。「全盲」の人は、障害者手帳の 1 級にあたるが、視覚による情報入手が不可能なため、聴覚・触覚・嗅覚など他の感覚機能で周囲の状況を把握する。「弱視」の人は、1 級から 6 級にあたり、情報入手の手段は、たとえどんなに効率が悪いとしても視覚に頼る傾向がある。また、弱視の場合、等級が同じであったとしても、視野の損失の程度や、明暗に順応する力の程度などにより、「見え方」「困り方」は千差万別であると言われる。

したがって、視覚障害者と言っても、様々な状況が考えられ、防災上の呼びかけや指導は、それぞれの人の特性やニーズにあわせて行われる必要がある。

本調査結果から、以下のようなことが明らかになったが、これらを参考として防災訓練への呼びかけや防災訓練方法を障害に見合ったものとなるように工夫し、また災害弱者の意見などを消防行政に反映させることが必要である。

(1) 日常生活でほとんどの人が火を使用しており、そのうち半数近くの人が火の危険を感じた経験がある。

本調査対象者は、88% の人が「日常生活で火を使用することがある」と回答している。火の使用がある人のうち、47.2% の人が火を使っていて危険を感じた経験を持っている。危険を感じた状況では、健常者でも起こりうるような「鍋の空焚き」「揚げ物をしているときに鍋に火が入った」といったものから、「火がついていることに気づかないで他のものに燃え移らしてしまった」など「見えない」あるいは「見えにくい」ことに起因すると思われる状況を挙げた回答もみられた。

周囲のものや身につけているものへの燃え移りを防ぐためには、火を使用する際の周囲の整理整頓を心がける、「防災製品」などを取り入れる等が有効である。また、頻度が高く、危険を感じる状況も多い「調理」については、「安全装置付き調理器具」や、日常生活用具給付等事業の対象になっている「電磁調理器」を使用することが、火災を出さないために効果があると考えられる。これらについては、より一層普及啓発する必要がある。

(2) 多数の人が集まる場所で火災が発生した場合、ソフト面での援助を期待する人が多い。

デパート・駅・病院など多数の人が集まる場所で火災が発生した場合、「避難の助け・手がかり」となるものとしては、「その場に居合わせた人の誘導」「館内放送・拡声器による指示」など人による援助・指示を挙げた人が多い。このような状況下で災害に遭遇した場合に、視覚障害者が躊躇することなく周りの人に伝え援助を求めることと、その場に居合わせた健常者が視覚障害者を援助すること、また、非常時に備えて、事業者が従業員に避難誘導の教育を徹底することなどの必要性を普及することが大切である。

(3) 「避難場所までの避難経路の確認」の必要性を感じ、訓練の種目として希望する人も多い。

視覚障害者がある場所へ移動する場合メンタルマップ(頭の中の地図)に従って移動すると言われているが、その形成には、実際に移動しながら歩数や壁、地形、音などで確認することが欠かせない。

本調査対象者も、その必要性を感じ、「避難場所までの避難経路の確認」を防災訓練の種目として希望している人が多い。地域などで健常者をまじえて、避難経路を実際に歩き、より詳しい周囲の状況や道路状況を伝えてもらったり、危険な箇所を発見することは、視覚障害者

のメンタルマップの形成のみならず、自分たちの地域の防災上の問題点を知る上でも有効な訓練方法であると考えられる。また、近隣住民とコミュニケーションを持つことにより、「視覚障害者が近所に住んでいる」ことを認識してもらうことで、いざというときの援助が受けやすくなることも考えられる。

(4) 防災訓練は「わかりやすさ」が最も重要である。

防災訓練では、「指導者に視覚障害者に対する理解・知識があること」、「器具に触れるなど体験の多い訓練」を望む人が多い。このことから視覚障害者は「わかりやすい」訓練を望んでいることがわかる。視覚障害者が「物」を把握する際、「動的触知覚」³⁾（手を自由に動かしながらものに触ることによりものを把握する方法）を用いることが効率的である。防災訓練の中でも消火器の取扱いなど、実際に器具に触れることにより、構造や使い方をしっかりと定着させることが大切である。指導する側もわかりやすい指示・説明を心がけ、指導する側の人数にも余裕を持たせ適切にサポートできる体制を作る必要がある。

また、防災訓練のPR方法も、ちらしや掲示板などの視覚による方法では十分な情報が提供されないことが考えられる。視覚に頼らないPR方法も併せて検討していく必要がある。

(5) ほとんどの人が近隣の助け合いを望んでいる。

99.7%の人が隣近所との助け合いが必要であると認識している。希望する助け合いの内容としては「いざというとき駆けつける」「地震や火災の時避難の手助けをする」など、非常時の援助が、「時々見回り言葉を交わす」などの日常的なコミュニケーションを上回っている。視覚障害者は、周囲の状況を直接確認できないことなどから「恐怖心」⁴⁾を持ちやすいと言われる。このことが、特異な状況である災害に対して「助け合いが必要である」とする回答が極めて高い割合になっている要因と推測される。

(6) 個人情報事前に消防署に知らせておきたいと考える人が多い。

障害の程度、名前、住所などの個人情報を万が一備えて、消防署に知らせておきたいと考える人は80%である。万一の際、視覚障害者などの災害弱者を円滑に救助するには、前もって情報提供がなされているかが重要である。

半面、身体に関する情報は扱いの慎重さが欠かせない。本調査でも年代の若い人ほど「知らせたくない」という人が多く、40歳未満では半数以上に及ぶ。また、等級別でも3級以下の人では、特別な援助を必要としないためか「知らせたくない」という人が多い。このようなことから、個人個人の自発性を尊重した情報収集体制と、提供された情報に対する十分なプライバシー保護の対策を講じる必要がある。

[参考文献]

- 1) 吉野由美子：視覚障害者の自立と援助、一橋出版、1998年、p.13、p.14
- 2) 東京都障害者震災対策検討委員会：災害弱者防災行動マニュアルへの提言—障害者及び、その家族などのために、1999年、p.109
- 3) 小柳恭治：触覚の世界、光生館、1978年、p.154
- 4) 中司利一：障害者心理・その理解と研究法、ミネルヴァ書房、1988年、p.128



写真1 視覚障害者による訓練風景

資料1 記述回答一覧

* () 内は件数

問2—2 火を使っていて危険を感じたことがありますか。具体的にお答えください。

- 1 ガスコンロ・調理中のなべに関して (27件)
- ・ ガスの消し忘れ (4件)
 - ・ なべをこがす・なべの空だき (4件)
 - ・ 焼き魚、脂の多い魚等を焼いていて炎が上がった時 (2件)
 - ・ なべに火が入って燃え上がった。(2件)
 - ・ ガスレンジの炎が思ったより大きい。
 - ・ 調理の際、消し忘れていることに気づかずやけどした。
 - ・ マッチで火をつけた時
 - ・ ガスの点火
 - ・ こがすことがある。
 - ・ 湯をわかしてそのまま出かけた。
 - ・ なべからはなれ水分がほとんどなくなってしまったのに気づかなかった。
 - ・ ガス炊飯器にガス管が接触していたことに気づかず火を吹き出した時
 - ・ なべがかたむいて取っ手が熱くなった。
 - ・ 火のそばにあったものが焼けた。
 - ・ ガスレンジの周りに燃えやすいものがあるのに気づかず火をつけた。なべに火が入って燃え上がった。
 - ・ なべを持つ時、動かす時
 - ・ 転がった菜箸がガスコンロの火で燃えた。なべの外側にはりついたラップに気づかずコンロにかけてしまった。
 - ・ 煮物をしていて近くにあったおたまが、熱で曲が

ってしまった。

- ・ 焼き魚、脂の多い魚等を焼いていて炎が上がった時

2 揚げ物の調理に関して (15件)

- ・ 油に火がついた、天ぷら油に火が入った。(7件)
- ・ フライパンに火が入る。(3件)
- ・ 油を使う料理をしている時
- ・ 天ぷらを揚げる時炎が入りそうで怖い。
- ・ 揚げ物をしている時に電話がかかってきた。
- ・ 油
- ・ 揚げ物をしている時になべに手をぶつけた。

3 着衣着火に関して (3件)

- ・ ふきんや袖口に火がついた時
- ・ 蒸し器の布巾、セーターをコンロの火でこがした。
- ・ ガスストーブの火が、たんぜんに燃え移った。

4 風呂の熱源などに関して (6件)

- ・ 風呂の空焚き (2件)
- ・ ガスに点火しても火が見えない。
- ・ 風呂スイッチ切り忘れ
- ・ 木造の浴室で煙突の加熱により天井裏をこがした。
- ・ 風呂の火をつけっ放しで忘れた。

5 暖房などに関して (6件)

- ・ ストーブをつけっぱなし
- ・ ストーブに油を入れる時、引火するのではないかと心配。
- ・ 給油するさい、ストーブから煙がでてきた。ライターで点火した時、いっきに燃え上がり、服の袖を焦がした。
- ・ 石油ストーブに火が入り燃え上がった。
- ・ 石油ストーブに点火する際、マッチを落としてカーペットを焦がした。
- ・ 電気ストーブの火を消したつもりで出かけたなら、布団が焦げた。

6 タバコに関して (4件)

- ・ 気が付かないうちにタバコの火が床に落ちていた。(2件)
- ・ タバコ
- ・ 灰皿に入れたタバコがくすぶっていた時

7 灸に関して (3件)

- ・ お灸が落ちた時
- ・ マッチの軸が落ちることがある。
- ・ お灸の最中火のついたもぐさを吹き飛ばし、ガスの不完全燃焼時に爆発しないかと思う。

8 灯明に関して (2件)

- ・ 仏壇に線香をつけた時、灰が落ちたことと、ろうそくに火をつける時
- ・ 灯明を倒した。

9 その他 (5件)

- ・ 油を使った時 (2件)
- ・ バッテリーの接触不良による煙の発生
- ・ 火が消えていないマッチをごみ箱に捨てたらごみ箱に火がついた。
- ・ 石油の空缶でゴミを焼却中、強風にあおられる。

問 19 東京消防庁に対する意見・要望など

1 防災訓練・教育に関して (12件)

- ・ 大学・高校の授業で防災関係の、体で覚える方法を教えてほしい。
- ・ 視覚障害者で訓練に参加する人は少ないが、いざという時は近所の人も自分のことで精一杯だから、自分の身は自分で守る知識を身につけていかなければならない。
- ・ 防災訓練は迎えにきてくれないと行くことができない。
- ・ 障害者にも防災訓練が必要だ。健常者よりも、障害がある分、災害時において生きる手段を知っているのと知らないのでは、差が大きいと思う。
- ・ 煙体験や震度5以上の地震の体験を希望者だけでなくできるだけ多くの者が受けられるように。
- ・ 視覚障害者を集めて訓練してほしい。
- ・ 視覚障害者向けに1対1の防災訓練、講演会を企画してほしい。
- ・ それぞれの自治体に障害者を含めた防災訓練をするように指導してほしい。
- ・ 地域の防災訓練などを通じて障害者の避難誘導訓練をしてほしい。
- ・ 防災訓練で視覚障害者が参加できる機会を与えてほしい。その機会に日頃視覚障害者に接触したことがない人も含めて訓練できれば、防災意識が広がると思う。
- ・ 防災館に行きたいがわかりやすい説明がしてもらえるか。
- ・ 講習会に気軽に参加できる体制を。

2 災害時の情報伝達に関して (12件)

- ・ 防災無線をどこでも聞きやすいようにしてほしい。
- ・ 地域に不慣れな人にもわかりやすい情報伝達を。
- ・ 非常時状況判断できないので、声をかけてくれるなど手助けをしてほしい。
- ・ 万一の時駆けつけたボランティアに適切なアドバイスのできる組織づくりと活動マニュアル・マップの作成
- ・ 避難所における情報提供(特に救護品配布時の視覚障害者への配慮)
- ・ スピーディーで正確な情報提供をお願いします。
- ・ 区内のどこで災害が発生しているかを常に聞けるラジオチャンネルがほしい。
- ・ 正確な情報がいち早く届くような方法を考えてほしい
- ・ 状況をメガフォンで知らせてほしい。
- ・ 消防の通信を聞こえるようにしてほしい。

- ・すべてラジオか携帯電話で教えてほしい。
- ・家の前に消火栓があるが、火災時、消防車が突然入ってきて止まる。規模や火災の状況がわかるように、マイクで情報を知らせてもらえると助かる。

3 感謝など（9件）

- ・生活の安全のためよろしく願います。
- ・全盲で一人なのでよろしく願います。
- ・何もできないと思うのでよろしく願います。
- ・全盲の夫婦で不安なのでよろしく願います。
- ・消防署の人が私の家を見回り灯油の置き場所など親切に指導してくれ感謝している。
- ・感謝している。（2件）
- ・要望する前に積極的に行政が行動してくれて感謝している。
- ・近所に火事があった時、消防隊が迅速にかけつけ、大事にならなくてよかった。

4 近所との協力体制に関して（8件）

- ・ふだんからの近所つきあいが何より大切だ。
- ・町内会などに障害者・高齢者の存在をマークした災害マップ作成
- ・災害時の人による、親切とはちがった、行政と住民が一体となったシステムを確立してほしい。
- ・毎日、避難場所の経路を歩いているが、行き交う人に声をかけ、視覚障害者が近隣にいることをアピールしている。
- ・ふだんの生活の中で障害者に対する理解が少ない。近隣の協力なしに避難することは困難であり、助けあいが必要だ。講習会などにこまめに参加し、近隣の人との交流を深めたい。
- ・近隣の援助が得られるような働きかけをしてほしい。
- ・より充実した災害弱者対策を。
- ・町会や自治会にはたらきかけ、高齢者、障害者を把握し、理解してもらえるようにしてほしい。

5 防災用品・設備に関して（7件）

- ・身体を守る防災ずきん、手袋などをまとめて買えるようにしてほしい。
- ・防災用品を公共施設（福祉関係の店）などで販売してほしい。停電を考え、夜光塗料を使った消火器の設置。
- ・安値で一式そろった防災用品セットはどこで買えばよいのか。
- ・ファンヒーター等音の出るものを作るよう、業界指導してほしい。
- ・見えにくい誘導灯が多い。色覚に障害があってもよくわかるコントラスト（例 黄色地に赤文字）のはっきりした色の基準にしてほしい。
- ・消火器などの普及・啓蒙
- ・ガラス飛散防止フィルムを買ったが取扱が難しい。視覚障害者が一人で使えるような機器を開発してほしい。

6 避難・避難場所に関して（7件）

- ・第一避難場所から障害者専用避難所への搬送計画の準備を。
- ・地震の際の一次避難場所の指定。障害別の特別な避難所の指定。
- ・避難所等の職員、ボランティアによるきめ細かい支援が必要。そのための準備も必要。
- ・緊急時に老人や障害者などを優先的に避難させて安全を確保できる体制を作ってください。
- ・地震時には電気・ガスなど自動的に止まるのか。そうでないと、避難場所まで行くことができない。
- ・避難場所は遠すぎる。緊急時どのようなタイミングで避難したらいいのかわからない。そこに行けば安全なのかもわからない。避難する時は安全のため、荷物は最小限にして避難しなくてはと思う。
- ・通路、避難路の確保がなされていない。

7 広報について（6件）

- ・消火器の廃棄方法、交換についてPRしてほしい。
- ・防災について点字の小冊子を作ってほしい。
- ・防災パンフレット・テープを作ってほしい。
- ・障害の程度にあわせた消火方法や避難方法のパンフレットを作ってほしい。
- ・日常遭遇しそうな一口ポイントを教えるマニュアルを作ってほしい。
- ・ラジオ、テレビで最近の火災の特徴、生命を守るコツ等をひんぱんに放送してほしい。消防署の訓練の様子等も放送してほしい。

8 救急搬送について（4件）

- ・救急車の台数を増やし、5分以内に必ず到着するように。救急病院の診療科目や診療指定の病院に関する点字かテープのパンフレットを作成してほしい。
- ・地域外でのかかりつけの医者へ気軽に搬送してほしい。
- ・ドクターカーを増やしてほしい。
- ・いつも病院とコンタクトをとり、救急患者が迅速に搬送されるように。

9 高層階からの避難・救出について（4件）

- ・はしご車を増やしてほしい。（2件）
- ・高層建物では震災時エレベーター使えず救助を待つのみだ。
- ・高層階で火災が発生した場合の、避難救助方法を検討してほしい。

10 防火診断、電気・ガスの点検に関して（4件）

- ・ガス・電気の点検してほしい。
- ・定期的な訪問。視覚障害者に理解・知識のある人に来てもらいたい。
- ・家庭訪問して取扱いなどを教えてほしい。
- ・家庭内の安全チェックを希望者にしてほしい。

- 11 防火パトロールに関して（4件）
- ・ 放火が恐いのでパトロールの強化をしてほしい。（2件）
 - ・ 定期的なパトロールを。
 - ・ ひんぱんな巡回警備が必要。

- 12 災害時の備えに関して（3件）
- ・ 放射線（災害）などあらゆる災害に対応するための資器材を各消防署に備えておくこと
 - ・ 外出時火災に遭遇した時の救援対策。
 - ・ 非常時、警察・消防がどの程度援助してくれるか確認し、周知してほしい。

- 13 その他（6件）
- ・ 実際に災害が発生した時前記の質問のような行動がとれるかに関心がある。
 - ・ 視覚障害者はみな同じような状況だと思う。その場で行動するしかない。今は住んでいる場所も家人もいるので安心している。
 - ・ 緊急システムの普及
 - ・ 以前、近くの消防署に火災などがあつたら、教えてくれるように頼んだが、実際火事があった時に何も知らせてくれずに、不安な思いをした。せっかく個人情報を届けたとしても前記のようなことでは届ける意味がないのではないか。個人情報をどのように活用するのか。
 - ・ もしもの時手引きをする人の派遣
 - ・ サイレンの音がすると周りの様子がわからなくなり歩きにくい。

2 障害の等級

「東京都社会福祉基礎調査（平成6年度版）」によると、東京都の平成6年10月1日現在の東京都の視覚障害者では1級が最も多く38%を占めていて、ついで2級が22%である。（図29）

このことから、東京都の視覚障害者の6割は全盲あるいは、強度の弱視であることがわかる。

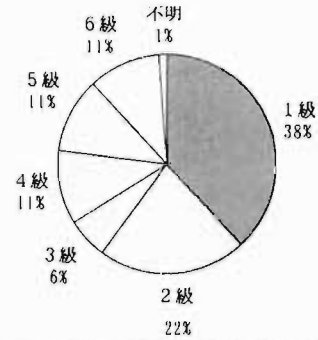


図29 視覚障害者障害等級の構成

3 年齢構成

「東京都社会福祉基礎調査（平成6年度版）」によると東京都の視覚障害者の年齢構成は、70歳代が23.3%で最も多く、ついで60歳代の19.8%、50歳代の18.8%であり、中高年以上が多いことがわかる。（図30）

資料2 視覚障害者の現況

1 障害の種類別にみた身体障害者数

「東京都福祉局業務統計月報」によると、平成11年度末に東京都が発行した身体障害者手帳交付数をみると、総数が約35万3千人、うち視覚障害者が約3万4千人で身体障害者総数の10%を占めている。（図28）

東京都の人口が約1190万人なので、人口に対する身体障害者手帳交付比率は2.9%、視覚障害者は0.28%である。

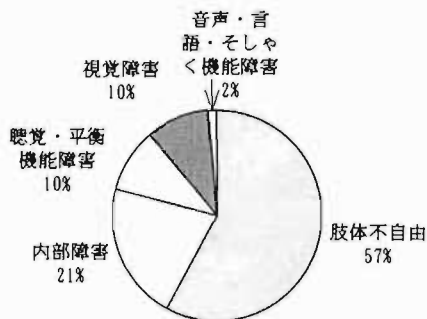


図28 身体障害者手帳交付状況（障害別）

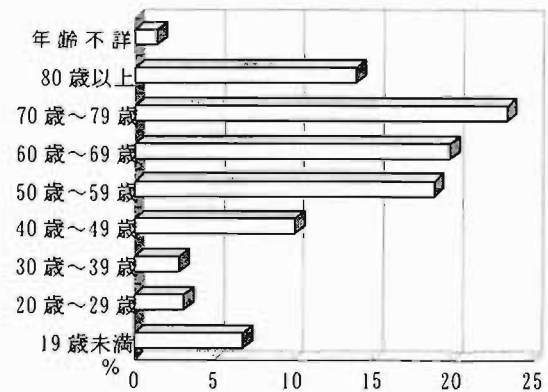


図30 視覚障害者の年齢構成

STUDY OF THE BEHAVIOR AND PSYCHOLOGY OF THE VISUALLY IMPAIRED PEOPLE IN AN EMERGENCY

Takayuki KUMAKURA*, Miho WATANABE*

Abstract

We sent questionnaires to visually impaired people for the purpose of surveying their disaster preparedness awareness on fires and earthquakes, and their emergency response abilities.

Main findings are as follows:

- 1 Almost every objects use fire in daily life, and nearly half of them experienced the danger of fire.
- 2 Many of them think it necessary to confirm the route to place of refuge, and they want to do it in a fire drill.
- 3 The most important factor of fire drill is easiness to understand.
- 4 Almost all of them wish for mutual support among neighbors.
- 5 Many of them want to let the fire department know of their personal information beforehand.

* Fourth Laboratory